

明治ステップセシウム混入ミルクについて

薬局営業部 2課弥生 中嶋 優太

「乳児への影響は大丈夫か」原発事故後の問題が次々と浮上する中、今回の報道もまた日本を不安に陥れた。特に乳児の親にとっては、安全でないものを飲ませるわけにいかないという親としての責任感と、万が一飲ませてしまった場合の我が子への健康被害、蓄積による影響などの不安を感じたであろう。

今回の事例を振り返り、私なりに必要な対応が考えられた。

今回の報道では「乳児用粉ミルク」と表現されていることが多かった。しかし「粉ミルク」には母乳代替製品として位置づけられる「乳児用調製粉乳」と、生後9カ月頃からの乳幼児期に合わせて離乳食で不足しがちな栄養素を配合した「フォローアップミルク」の2種類があり、今回の対象商品は後者である。現在、母乳や「乳児用調整粉乳」を飲ませつつ離乳食、牛乳などへと移行し、フォローアップミルクは飲ませない、というお母さんも多いことから、「赤ちゃんに欠かせない」というニュアンスの報道は大袈裟であったことが分かる。問題となった製品は一般的な粉ミルクの中でも使用用途が限られてもので、対象期限も特定されていることを正しく認識する必要がある。原因となった熱風乾燥工程を経るその他の商品、他メーカーの検査結果なども併せて公表することで「今の粉ミルクはどれも危険」といった消費者の過剰な反応を防ぎ、安心して粉ミルクを使用してもらうことができるのではないかと考える。

また消費者が一番気になる人体への影響だ。これは摂取したベクレル数 (Bq) に実効線量係数 (mSv/Bq) をかけた預託実効線量 (mSv) を算出することでおおよそ把握できる。ステップ 28g を水に溶かして 200ml に調整する場合、0~1歳の預託実効線量は $0.02 \mu\text{Sv}$ である。したがってステップ 850g 1缶で 200ml のミルクを約 30杯作ることができるので、1缶購入して飲ませ続けた時の被ばく線量は $0.6 \mu\text{Sv}$ であると仮定する。日本の平時の一般公衆の年間線量限度は 1mSv であることから、1缶飲ませ続けた被ばく線量はこの 0.06% である。この割合は非常に低いと言ってよいのではないかと考えられる。万が一飲ませてしまったらという不安には「健康への影響は極めて少ない」とことと併せて、具体的な数値を説明するなど安全性について消費者の理解を深めようとする努力が必要である。

原発事故後、外部に拡散された放射性物質の汚染が心配される中、製造工程を確認して混入を未然に防ぐことや、混入の可能性を確認するための試験や安全性の説明をおこなうことができなかつたのか。製造工程や食品衛生の管理責任者が薬剤師ではないことを願いたい。また、今回のセシウム混入事故後の対応の遅さ、自主回収以外に消費者を

安心させる対応はなかったのかと疑問を抱く。食品を扱う会社、ましてや乳幼児が口にするものを扱う会社としての自覚や責任感はここまで薄いものなのか。

今回町田&町田商会での対応は、対象商品の撤去、回収に留まらなかった。報道後速やかに、対象商品以外のすべての商品を県薬衛生検査センターに品質検査を依頼し、その結果を消費者にわかりやすく公表するといった独自の対応をとった。今回の検査の質、公表の仕方、その迅速さは、消費者の健康、安心を第一に考える地域薬局の使命感が生んだ結果であろう。

薬剤師には「調剤、医薬品の供給その他薬事衛生をつかさどることによって、公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もつて国民の健康な生活を確保する」といった任務がある。安心、安全を望む一般の消費者はメディアの報道やインターネットなどの情報に頼らざるを得ない。このなかで科学的な「リスク」という観点から、消費者にきちんと説明するといった薬剤師の義務は大きい。公衆衛生、食品衛生、放射化学を履修した薬剤師がその情報を冷静に咀嚼し、事実を正確に伝える義務があると改めて感じた